

モナド-私-死200506-210815

我々は、死を睡眠より、類推するしかない。

死は、一切の、世俗から、解き放たれる。寒くもなく、暑くもなく、痛くもなく、痒くもなく、苦しくもなく、楽しくもなく、嬉しくもなく、そういう意味で、極楽である。さらに意識もなく、感覚もなく、覚えもなく、私が自分であると認識する意識もなくなる。現世でのあらゆる経験も自分の意識からなくなる。すべてを取り去った「私」だけが残るのだろうか！プラトンのアイデアに近い意味でいうなら、すべてを取り去った「私」という内包以外何もないものである。あるいはこの「私」は、ライプニッツのモナドのようなものではないだろうか。 森 久紘 記

現実的存在が個体の存在であることが明かに認識される場合にはモナド論のような立場があらわれて来る。モナドは宇宙の生きた鏡である。同じ町が様々の異つた方面から眺められた場合に、全く別のものであるように、唯一の宇宙も各モナドの異つた視点から見られた時に、異つた多くの宇宙として現われて来るのである。モナドによつて表現される対象は唯一の宇宙であるが、モナドの表現する仕方は各々異っている。モナドは「形而上学的点」であるが、この形而上学的点p78:の存在理由は「数学的點」に位置を占めてその独自の視点から宇宙を表出するところにあるのである。眞に存在するものとはモナドのほかにはない。存在とは原本的にはモナドの存在である。モナドが表現する宇宙そのものもモナドの統体にほかならぬ。従つて宇宙には完全に相同じな二つの事物はない。完全に相同じな二つの葉もなければ、完全に相同じな二つの雨滴もない。現実には相異つている諸々の個体より存在しない。現実として存在するものは現実的存在それ自身によつて何等か個体的のものである。モナド論にあつて「不可弁別即同一」の原理が閑却されるならばモナド論は漫画化されてしまう。モナドの多様性を「純粹諸我」の一様性へ単色化し、本質的還元の地平から間主観的還元のみを問題とす

るのは個体の個性性に対する感覚に乏しいと云わねばならぬ。
要するに、我々が「三角形とは三つの線で囲まれた面の一部である」という場合の「ある」すなわち三角形の本質は普遍的のものである。それが三角形のアイデアである。苟くも三角形である以上は如何なる三角形にも普遍的に妥当する「ある」である。それに反して、「鉛筆で描いた三角形がある」という場合の「ある」すなわち狭義の存在は、或る時、或る場所に一定の角と一定の大きさを占めているところの個体としての特殊の三角形に就て云われているのである。それ故にp79:本質すなわち可能的存在は普遍者に関し、狭義の存在すなわち現実的存在は個体に関するということが出来る。
(実存哲学の二 可能的存在と現実的存在の最後の方 九鬼)

- *ライプニッツの実体概念は单子(モナド)の概念である。
- *実体とは能動的力を有ったものである。
- *実体とは力を有っている個物である。
- *不可分な単一体を見出そうとするならば非物質的な領域へ移らねばならぬ。そして物体は非物体的な成分から成り立っているという考えを有たねばならぬ。物理的の点としてのアトムは物理的である限り現実的であるがそれは点でない。即ち不可分でない。数学的の点は不可分である限り点であるが現実的でない。形而上学的または実体的点として非物体的な精神に類似した単一体のみが不可分性としての点という性質と現実性とを兼ね備えている。即ち单子(モナド)が真のアトムである。モナドは不可分であるから永遠である。
- *モナドは非空間的で点である故に外部から何等の影響を受けることができぬ。モナドはその諸状態を自己自身の内部から発展させる。他者を要しないで自足している。
- *非物質的とは精神に類似するという意味であるから非物質的な力とはつまり表象する力ということになる。世界に実在するものはモナドとモナドの表象とだけである。
- *モナドという一者の中に表現され表象される多様性とは何である

かというに、それは世界全体である。各々のモナドは他のすべてのモナドを自己の中に表象する。それ故に各々のモナドは集中した宇宙全体である。小さな宇宙である。各々の個物は自己の中に無限性を含んでいる。そして最高の叡智の持主があつて曖昧な表象が直ちに判明な表象に変わるとしたならば、そういう最高の叡智の持主は唯一つのモナドの中に全宇宙と全宇宙事象とを読み取ることができる。すべて在るもの、在つたもの、在るであろうものを読み取ることが出来る。なぜなら過去はその足跡を残し、未来は既に現在に素質として有るもの以外には何物をももたらさない。モナドは過去を負い未来をはらんでいる。かくしてモナドは宇宙の鏡である。生きた鏡である。そしてその宇宙の鏡は諸事物の影像を自己の働きによって産むのである。即ち内的な萌芽から発展させる。外部の影響を受けることなくして内的な萌芽から発展させるのである。モナドは窓を有たぬ。その窓を通して何かが入ったり出たりするような窓は有たぬ。モナドの行動は神と自分自身だけに依存している。

すべてのモナドは同一の宇宙を表象する。しかし各々違って表象する。即ち各々特殊な見地に立ってその見地から表象する。

*世界には種類の相違というものはなく単に度合の相違があるだけである。静止と運動は対立ではない。なぜならば静止とは無限に小さい運動と考えることが出来る。楕円と放物線とは質的に違っているものではない。なぜならば楕円に妥当する法則は放物線にも適用できる。相等とは極めて小さい不平等である。受動とは阻止された能動である。悪とは少ない善である。乱雑な表象とは判明さの少ない表象である。動物とは無限に小さい理性を有った人間である。植物とは極めて少しの意識を有った動物である。流体とは程度の低い固体である。(連続の法則)

*内的に弁別の出来ないようなものは二つのものではない同一のものである。二つのものがある以上は必ず内的に弁別が出来なくてはならぬ。必ず内的に相違している。

*完全に相同じような二つの事物はない。完全に相同じような二つの事象もない。もし完全に相同じであったならばそれらは二つでは

なく一つである。差異は決して単に数量的ではない。または差異は単に空間的及び時間的ではない。差異は常に内的である。各々の物は自己独特の本質によって他の物から相違している。この不可弁別者即同一の原理は真の実在である。モナドに妥当すると共に現象界にも妥当する。完全に相同じな二つの葉もなければ完全に相同じな二つの雨滴もない。

*モナド自身は部分を有たぬという意味で単純なものであるがモナドは複合体をつくる。モナドの複合体が物体である。

*宇宙のすべてのものは生きている。死んでいる物質というようなものはない。

*物体がすべて生きているに対して、心はすべて身体を有っている。身体を構成しているモナドは絶えず新陳代謝している。その変化は緩慢である。変化が早く行なわれた時に死亡とか誕生とかいうことを云う。然し本当の死亡もなければ本当の誕生もない。心が不滅であるのみならず生きているものすべて不滅である。死とは減少であり捲き込みである。誕生とは増大であり展開である。生物がいわゆる死ぬと身体の器官の一部を失って捲き込みのねむりの状態、萌芽の状態に還るのである。生物は誕生の前にもそういう状態から増大であり展開に醒まされたのである。動物にも人間にも誕生前の存在もあり死後の存在もある。 九鬼 周造 6.192

モナドには表象の仕方によって三種類ある

单子 (モナド)	┌	裸の单子…曖昧な表象又は無意識的表象より有たぬもの
		心(靈魂)…記憶を有ったもの、意識的表象を有つ
		精神…理性を有って一般的なものの認識を有つもの

ふげん社のwebページコンテンツに下記のものがある。
ライブニッツのモナドについて吉田隼人は次のように述べている。

第1回 雨はライブニッツのように
吉田 隼人(よしだ・はやと)

雨の音で何にも聞こえない
君のくちびるは
“サヨナラ”のカタチを描いて
こわばる
——RIKA「雨の中で僕は」

青春とは傘も持たずにどしゃ降りの雨の中をあてもなく歩きまわるような人生の一時期のことだ、と、ある哲学の概説書に書いてあった。哲学の本をそう書き出すことの当否はともかくとして、ぼくはその本について、今はもうこの一文しか覚えていない。実際、十代半ばから二十代も後半にさしかかった今にいたるまで、ぼくは傘をどこかに置き忘れたまま、雨の中をずぶ濡れになって、みじめに彷徨ってきたような気がする。けさ目を覚ましたときも雨が降っていた。窓に打ちつける激しい雨音で、ぼくは夢も見ないほどの深い、泥のような眠りから数時間ぶりに醒めた。おもてはまだ暗かった。

モナドロジー／形而上学叙説(中公クラシックス)

ライブニッツは、夢を見ない深い眠りと死とのあいだに本質的な差異を認めていない。『单子論(モナドロジー)』の第20節、第21節で「我々が気絶した時や夢一つ見ずに深い眠に入った時」、また「絶えず同じ方向に何回も何回も続け様に廻る」ことで「目が廻つて気が遠くなり少しも物事の見別けが附かなくなる」ときを取り上げて、彼は「死は動物に暫くの間この状態を与へることがある」と書いている。これに先立つ哲学者アルノーとの往復書簡でも、ライブニッツはこう書いている。

「死の似姿である眠り、恍惚、またこれも死とみなしてよいでしょうがカイコが繭に入りこんだ状態、おぼれたハエに乾いた粉をまぶして蘇生させること(これはそのまま放置すれば、まちがいなく死んでい

たはずです)、命のかけらもないような葦のなかの冬場の巣からのツバメの蘇生、また凍死、溺死、扼死したひとびとの蘇生などを考えてみてください……」。

ぼくの故郷は養蚕業が盛んだった。透き通るように白いカイコはひたすらに桑の葉だけを食べ、やがて雪のように真っ白な絹糸でおのれの繭をつむぎ、長い眠りにつく。死とはそんなものではないですか、と、ライブニッツはぼくに語りかけてくる。雨はまだやまない。

(一部省略)

ライブニッツのような雨とは、いったいどんな雨なのだろう。

降りしきる無数の雨粒の、そのひとつひとつのしずくに周りの景色が映りこんでいる。雨粒ひとつひとつの中に世界があるともいえるのだが、雨粒の中の世界と雨粒の中の世界とのあいだにも、また、雨粒の外の世界と雨粒の中の世界とのあいだにも交通があるわけではなくて、あくまで反映というかたちでひとつひとつの中にそれぞれの世界がある。こう考えたとき、雨粒はライブニッツのいう单子＝モナドとどこか似てはいないか。

ライブニッツがモナドという言葉を使ったのは晩年になってからで、それまでは同じ概念を「実体的形相」「個体的実体」「原始的な力」「実体的統一」などさまざまに呼び替えていたが、ぼくが理解している範囲で乱暴に言ってしまうえば、モナドというのは「こころ」とか「魂」、もっといえば「わたし」ということだと思う。モナドは人間だけでなく、動物にもある。たぶん植物にもあるし、もしかしたら石や砂粒にもあるかも知れない。わたしがわたしであること、その犬がその犬であること、その薔薇がその薔薇であること、その石ころがその石ころであること、その雨粒がその雨粒であること。そういうことをライブニッツは、たぶん「モナド」と呼んだ。モナドの語源はギリシャ語のモナス。「一」という意味だ。ひとりひとり、一匹一匹、一輪一輪、一粒一粒……。それが「モナド」ではあるまいか。そのモナドは「拡がりも

形も可分性もない」単純な実体で、分解されることもなければ、勝手に生じたり消滅したりもしない。そして何よりモナドには「物が出たり入ったりすることのできるやうな窓が無い」。わたしは窓を通過して勝手にあなたの中に入りこんだり、犬の中に、薔薇の中に、石ころや雨粒の中に入りこんだりすることはできない。わたしはわたしでしかありえないし、その犬はその犬でしか、その薔薇はその薔薇でしか、その雨粒はその雨粒でしか、そして、あなたはあなたでしかありえない。

こうした考え方と「窓が無い」という印象的な比喩のせいで、ライブニッツのモナド論は今でも悪しき独我論の代名詞のように言われることがある。お互いに窓がないのでは、モナドとモナドのあいだ、わたしとあなたのあいだでは、決してコミュニケーションがとれないことになってしまう。それを何とか取り繕うためにライブニッツは「予定調和」という考え方を持ち込んでごまかそうとしたのだ、と悪口を言われることもある。英国の哲学者バートランド・ラッセル卿はモナドロジーを「おとぎ話」と称した。しかしライブニッツはモナドを「宇宙の永久的な活きた鏡」とも呼んでいる。モナドには表出とか表現とかいった性質がもともと備わっており、お互いがお互いを、また、お互いがいるこの世界全体をも、それぞれの角度から切り取って、鏡のように映し出しているのだ。ぼくの手許にある古い研究書には「単子には窓がないというよりはむしろ単子全体、単子自身が、窓であるとも言えるべきであろう」という一節がある(下村寅太郎『ライブニッツ』)。窓ガラスに景色が映るように、ぼくたちはモナドとしてお互いを、世界を映し出しているのだ。モナドロジー以前に書かれた『形而上学叙説』でもモナドという言葉の代わりに「実体」という言葉を使って、ライブニッツは言っている。「どの実体も、世界の全体のようなもの、神の鏡ないしは宇宙全体の鏡のようなもので、ちょうどみる者の位置にそくしておなじ都市もさまざまに表されるように、各実体は自分なりのしかたで宇宙を表現する[映しだす]のである。したがって、宇宙はある意味で実体の数だけくり返され、神の栄光は、そのわざが

まったく異なって表されるに応じて増幅される」。それぞれの雨粒はそれぞれの降る角度に応じて、外の世界をそれぞれ別なかたちで映し出す。雨粒の中の世界と雨粒の中の世界とのあいだ、雨粒の外の世界と雨粒の中の世界とのあいだを行き来することはできないけれど、ひとりひとりのところの中にそれぞれの世界があるように、ひとつひとつの雨粒の中にもそれぞれの世界がある。鏡のように、窓のように、そしてモナドのように、無数の雨粒はひとつひとつ、それぞれの世界を映しながら今もなお、ぼくの頭上に降り注いでいる。

形而上学叙説 ライプニッツ?アルノー往復書簡(平凡社ライブラリー)

ライプニッツは『形而上学叙説』に「各人の個体概念はその人物にいつか起こることを一挙に含む」とも書いている。神の眼から見ればカエサルはルビコン川を渡ることも渡らないこともできたが、神はルビコン川を渡るカエサルを選んだ。カエサルという雨粒はルビコン川を渡る世界を内に宿して、神のもとから地上に降り注いだ。そして神は常に最善の結果をもたらすような選択をする。ユダが罪を犯すことを知っていながら、罪を犯すべきものとして神はユダという雨粒を選んで地上に降らせた。「神はユダが罪をおかすであろうことを予見していたにもかかわらず、ユダが現実存在することを善しとしたのであるから、この悪は全宇宙において十二分につぐなわれ、神はこの悪からより大きな善を導くことができ、要するにこの罪人ユダという現実存在を含む系列こそが、あらゆる可能的な系列のなかで最も完全なものなのだ」。この考え方はライプニッツの生前に唯一公刊された著作『弁神論』のなかで「運命の宮殿」として寓話仕立てで語られたことから有名になった。この寓話はひどく美しい。ライプニッツ研究の碩学イヴォン・ベラヴァルのもとで学んだある留学生は、のちにこう回想する。

マルセル・シュオップ全集(国書刊行会)

「ベラヴァル先生は逸話を好んで披露されたが、なかでもライプニッ

ツの『弁神論』の最後のほうに出てくる「運命の宮殿」の話を先生が語り直されるのを聞くのを私は好んだ。セクストゥス・タルキウスはリウィウスの『ローマ建国史』に名を残す悪者であるが、『弁神論』では「運命の宮殿」にあって善良なるものとしての生涯も含めて、さまざまな可能世界が上演されるのを目の当たりにする」(千葉文夫「モナドの鏡」『マルセル・シュオップ全集』葉文)。神の眼前には可能世界、つまりありうべき全ての世界がひとつひとつ映し出されている。セクストゥスが悪人となる世界、セクストゥスが善人となる世界、そのどちらでもない世界……「現実」としてたったひとつが選び出される以前の無数の世界たち。それを見つめる神の愉悦は、ひとつひとつの雨粒がそれぞれの内に世界を映し出し、乱反射しながら降るのを眺めるぼくたちの愉悦に似ているかも知れない。

しかしこの美しい寓話は、楽天論として批判に晒されることとなる。無数にきらめく世界からはいずれ、神の手によってたったひとつの現実世界が選び出される。そしてその世界には「より大きな善」につながるとはいえ、個々の「悪」はやはり確実に存在する。世界全体としては、神の視点からは「より大きな善」につながるからと言われて、ぼくたちは目の前の悪に対して納得することができるだろうか。ライプニッツの没後のことだが、リスボンの街を大地震と大津波が襲い、おびただしい数の死者や被災者が出た。彼らを前にして、それでも「神はこの悪からより大きな善を導く」などと言って澄ましていられようか、というヴォルテールの叫びは現在のぼくたちにとって、あまりにも重い。

降り続く雨音の向こうでかすかに、どこかの家のラジオから懐かしい歌が聞こえてくる。

「晴れたら靴をはきかえよう、電車に乗ってゆられていこう。晴れたらずっと歩いていこう……晴れたらきっと何でもできる……晴れたら、そうよ、何でもできる……」(國府田マリ子「雨のちスペシャル」)。雨はまだ、当分やみそうにない。

森久紘 追記

2021年8月19日、コロナウイルスのデルタ株が蔓延し、感染者数を日々更新している。またここ十日ぐらい、豪雨が各地に降り、被害が出ている。こんな折に「吉田隼人」氏の「雨はライブニッツのように」をみつけた。長い文であるが、参考、引用、掲載させて頂いた。8月28日、二女晴香の夫、一樹君がコロナ陽性反応が出た。